

あなたの愛など要りません 4

登場人物紹介

CHARACTERS

ヘンドリック

ランスロットの父。
謎めいた「白の世界」に
囚われている。

ラシェル

ランスロットの母。

キンバリー

ランスロットの義父。

ランスロット

バームガウラス公爵かつ
王国騎士団の騎士。
誠実で愛情深く、
責任感が強い性格。

ヴィオレッタ

元・レオバーファ侯爵令嬢。
継母と義姉から使用人同然の
扱いを受けていたが、
ランスロットに救い出され
トムスハット公爵の養女となる。

スタッド

ヴィオレッタの実父。
侯爵領と爵位を売り、
平民となる。
歪んだ価値観の持ち主。

ライザ

ヴィオレッタの義姉。
我儘で、自分がこの世で
一番可愛いと思っている。
とある子爵家で
匿われているようで……？

目次

あなたの愛など要りません 4

7

番外編 むかし、むかしのお話

229

あなたの愛など要りません 4

プロローグ

僕——ランズロット・バームガウラスは、王国騎士団の騎士として王都内を巡回警護中、偶然ある少女を保護した。

紺のお仕着せ姿で流行りの菓子店の包みを持っていた少女は、レオパーファ侯爵邸への行き方を尋ねた。新人の使用人が不馴れな王都で道に迷うのはたまにあることで、今回もそれだと考えた僕はレオパーファ邸への道を説明したが、少女は歩き始めてすぐに倒れてしまう。

医者に診せようと慌てて彼女を抱き上げた僕の前に、レオパーファ侯爵家に勤める護衛が現れる。そして知った。少女の名前はヴィオレッタ・レオパーファ。お仕着せに身を包み、使い走りさせられていた彼女が、れっきとした令嬢であることを。

ただし、家族からの扱いは使用人も同然、いや、それ以下だった。しかし彼女には、その境遇を甘んじて受け入れるしかない事情があり、僕は眠りながら涙を流す彼女をなんとか救いたくて、助力を約束する。

『僕を信じて待っていてください。辛くても、どうか諦めないで』

そうして調査を開始すると、一見、父親の再婚に起因する継子虐めのように思われた状況は、実

際はより複雑に絡み合っていた。

継母と異母姉は、実父のレオパーファ侯爵が気まぐれで側に置いたどうでもいい駒に過ぎず、愛も情も存在していなかった。

レオパーファ侯爵の歪んだ価値観がほぼ全ての原因と言って差し支えなく、その犠牲となったのがヴィオレッタ嬢と、彼女を屋敷に留め置くために人質とされた乳母一家だったのだ。

ヴィオレッタ嬢がレオパーファ侯爵家から出て行けば乳母一家は殺される。

彼女の伯父ハロルド・トムスハット公爵が四年前に彼女を引き取るうとして失敗したのは、陰でそのような脅しがあったから。

しかし、ハロルド卿は諦めていなかった。

僕は卿に接触し、人質にされた乳母一家の行方を共に追う。ばらばらに引き離され、隠されていた一家の最後のひとりの所在を突き止めた僕たちは、保護救出作戦を計画する。

ヴィオレッタ嬢、もしくは人質にされた乳母一家のうち誰かひとりでも逃げる素振りを見せた時点で知らせが走り、残る全員の命が危うくなってしまう。そのため、慎重にタイミングを計って人質全員を救出し、ヴィオレッタ嬢を迎えに行く必要があった。

そうして、ついにヴィオレッタ嬢は蛇のように狡猾な実父と決別する。

それまでの苦労を強いられる生活から解放されたヴィオレッタ嬢は、ハロルド卿の養女となり、みるみる本来の美しさを取り戻していく。それを呑気に喜んでいた僕は、彼女との縁談を望む合息たちからの手紙が続々とトムスハット家に届いていると知り、慌てに慌てた。

焦るあまり、サイズが合っていない指輪を用意するというとんでもないミスを犯すものの、渡す前に判明したお陰で、表向きは何事もなく一度目の求婚でヴィオレッタ嬢が承諾してくれたことになっっている。

サイズ違いの指輪の件はヴィオレッタ嬢も知っているから、本当に表向きの話だけだ。

僕は油断していたのだろう。

人質救出に成功し、ヴィオレッタ嬢がレオパーファ侯爵家から解放されて、嵐はもう過ぎ去ったも同然だと考えていた。これから少しの後処理がある程度だ。

いや、素直に認めよう。

僕は浮かれていたのだ——初めて抱いたこの気持ちに、ヴィオレッタ嬢との婚約が無事に成立したことに。

第一章 恋に浮かれる

「……今日も付けてくださっているんですね」

僕は、晴れて婚約者となったヴィオレッタ嬢の首元に視線を向け、照れと恥ずかしさと嬉しさの入り交じった複雑な声を漏らす。

ヴィオレッタ嬢の首元には、生まれて初めて買い求めたものの出番のないまま終わった——そう、例のサイズ違いの指輪が、中に鎖を通して首飾りとしてゆらゆら揺れている。

指輪にサイズがあることを知らなかったなんて、七歳の子ともならいざ知らず、二十歳の、しかも筆頭公爵家当主がしている言い訳ではない。

頼りない男、無知で心許ないと呆れられても仕方ないところを、ヴィオレッタ嬢は『純粹さの証』と言ってくれた。そして、もしまだ処分していないなら身に着けたいとも。

『だって、ランスロットさまが私に贈ろうと思って、初めて買い求めてくださったものですよ』

『ですが……サイズが合いませんので……』

間違えたとはいえ、いい加減に選んだ指輪ではない。金属の質や石の色など、ヴィオレッタ嬢を思って真剣に吟味したものだった。ヴィオレッタ嬢の瞳と同じ、海のように美しく澄んだ青色の石はないかと。

その気持ちを慮おもんばかつてくれたヴィオレッタ嬢の優しさを嬉しく思いつつ、やはり指輪として贈るのには憚はばかられて、つい口ごもってしまふ。

『ネックレスにするなら、サイズなんて関係なくなると思うんです』
『ネックレス？』

ヴィオレッタ嬢は、金の細い鎖を指輪に通して首から下げてみせた。

金の台座に載った青色の石が、金の鎖に違和感なく馴染んで彼女の首元で揺れる。

侍女が持ってきた手鏡を覗き込んだヴィオレッタ嬢が、『ほら』と嬉しそうに笑う。

『ご覧になって、ランスロットさま。思った通りとっても素敵ですわ』

その笑顔と言葉が、ぐっと胸に迫る。

宝飾店で散々悩んだ末にこれと決めて購入して、でも馬鹿みたいな理由で大失敗に終わった指輪が、ヴィオレッタ嬢の首元で日の光を反射してきらりと光る。

失敗した僕が言っているのだろうか。ああ、でも彼女の言う通り……

『……本当ですね。とても、綺麗です』

思い出しては苦さと恥ずかしさを感じていた。稚拙すぎる間違いだった。なのに、彼女は情けない謂いれのついた指輪に別の役目を与え、愛おしんでくれる。

『ありがとうございます。ふふ、私ったらなんて幸せ者なのかしら。ランスロットさまから素敵なお贈り物を、ふたつと同時に頂いてしまいましたわ』

違う。僕の子どものような間違いを笑うことも馬鹿にすることもしない、あなたのような女性と

出会えた僕こそが幸せ者だ。

ちやんと言葉にしてそう言えたかどうか。

彼女の笑顔にすっかり見惚れていた僕には、残念ながらもつきりとはわからない。

それ以来、ヴィオレッタ嬢はいつもふたつの指輪を身に付けてくれている。ひとつは彼女の左手の薬指に、もうひとつはネックレスとして彼女の首元に。

そうして僕もまた、会うたびそのふたつの指輪の所在を確かめるようになった。彼女のおかげで、僕が初めて買った指輪は、無知と未熟さの象徴として記憶の底にひっそりしまい込まれずに、今日も彼女の首元で輝いている。

「ほらほら、いちゃいちゃしてないで、さっさと席に着いてよ」

サロンの入り口でヴィオレッタ嬢を見つめていた僕に、奥から呆れまじりの声がかかる。

ハロルド卿のひとり息子で、次期トムスハット公爵であるジェラルド卿だ。

ヴィオレッタ嬢の従とこ兄妹で、彼女が公爵家の養女となった今は立場上、義兄ともなっている。ジェラルド卿は、用意されたテーブルの席に呆れ顔を隠しもせずに座っている。

そうだった。今日はジェラルド卿と一緒に、スタッドに関する報告をヴィオレッタ嬢にする予定だった。

ヴィオレッタ嬢の血縁上の父スタッド。彼女と絶縁した後、彼は領地と爵位を売って平民となったが、その後も彼の周りはずっと慌ただしかった。

ついには決定的な事件が起き、ヴィオレッタ嬢にも伝えておいたほうがいいという話になったのだ。

「……失礼しました。ヴィオレッタ嬢に三日ぶりに会えて、嬉しさのあまりつい……」

婚約が決まって、どうにも浮かれているようだ。ジェラルド卿と一緒に待っていると分かっていたのに、ヴィオレッタ嬢の顔を見たらすっかり頭から抜け落ちてしまった。

「まあ、婚約したての頃はこんなものだよ。分かっているから大丈夫。さあ、座って」

怒るといふより、からかっているのだろう。軽い調子で流したジェラルド卿は、お茶を用意したメイドを下がらせ、ひと口飲んで喉を潤した後に口を開く。

「まずはどうでもいい話からしておこう。スタッドからトムスハットトムスハット家に抗議の手紙がきた」

「抗議……まさか絶縁したこと……？」

不安そうに眉を顰めるヴィオレッタ嬢に、ジェラルド卿が肩をすくめる。

「それならまだ分かるんだけどね。なんと、領邸に置き去りにされたロアンナ夫人の対応にかかった費用を、売却代金から差し引いたことへの抗議だった。好きなように処理すればいいものを、勝手に世話をしておいて費用を差し引くとは何事かってね」

「そんな勝手なことを……」

ロアンナとはスタッドの実母である。スタッドが爵位を売った今は彼女も平民だが、それまでは前侯爵夫人としてレオパーファ領内の屋敷で暮らしていた。

スタッドと因縁のある彼女は、十年近く前に息子スタッドに毒を盛られて四肢が不自由になっている。

使用人に世話されながら寝たきりの生活を送っていたが、スタッドがいきなり爵位を売却。それを知った使用人たちは屋敷から金目のものを持って逃げ出し、動けない彼女は屋敷に残されていた。視察に向かったジェラルド卿が彼女を発見し、人を雇って施設に収容するよう手配したのだ。

「それは代理人を通して話をして、すぐに決着がついたから大丈夫。一応話しておこうと思っただけ。それで、ここから本題なんだけど」

ジェラルド卿は指を三本、ヴィオレッタ嬢に向けて立ててみせた。

「スタッドに襲撃が三回あったそうだ」

「襲撃……？」

「ああ。一度目はまだスタッドがレオパーファ邸にいた時で、あとの二度は王都のホテルに移ってから。食事とかで外に出た時に襲われたらしい」

平民の生活に文句を言っているとか、変わらず贅沢をしているとか、そういう類たぐいの報告を予想していたのだろう。思いがけない話に、ヴィオレッタ嬢はさっと青ざめる。

「あの、それで、お父さま……いえ、スタッド、さん、は……」

「一度目は屋敷に配備していた私兵が対応、平民になってからは雇っていた護衛たちが応戦してスタッドは無事だよ。今もホテルで贅沢に暮らしている」

「そう、ですか……でも襲撃なんて、一体誰が……」

ヴィオレッタ嬢はほっと息を吐いてから、不安そうに呟く。そう、大事なものはここからだ。先に話を聞いていた僕は、ヴィオレッタ嬢の隣で姿勢を正す。

「ヴィオ。捕まえた襲撃犯を調べたら、いずれもゼストハ男爵家の関係者が差し向けた者たちだったそうだよ」

「ゼストハ……」

ゼストハ男爵家とは、スタッドの後妻になったイゼベルの生家。

レオパーファ侯爵家の寄り子貴族で、ヴィオレッタ嬢の乳母一家のひとりを預かり、奴隷まがいの扱いをしていた家だ。

かつてはスタッドにべつたりだったゼストハは、イゼベルの離縁で決別した。いや、離縁だけならここまで深い亀裂は走らなかつたかもしれない。

スタッドは、離縁と同時にイゼベルを娼館に売り払い、金を受け取っていた。ゼストハ男爵家はあとでその事実を知り、激怒した。

「いやあ、相当恨んでいそうだよね」

ジェラルド卿は、頬杖について軽い口調で続ける。

「スタッドは予想より早く自滅するって、報告書を読んだ父上は言っていたよ。ゼストハの奴らにやられる可能性っていうより金銭面でき。有り金はじきになくなるだろうって」

ジェラルド卿の言葉に、ヴィオレッタ嬢が目を丸くする。

それはそうだろう。彼女はスタッド（其父）に決別を告げたあの日、ハロルド卿が事業の買い取りで提示した金額を聞いている。

加えてその後、スタッドは爵位と領地までハロルド卿に売り、さらなる巨額の金を手にした。そ

れらと比べたら額は少なくなるが、イゼベルを売った金やイライザの結婚準備金などもある。

全て合わせれば金貨千五百枚以上。普通の平民なら贅沢に暮らしてもあと三、四十年——つまり残りの人生を楽に暮らせる額だ。それでこんなに早く金に困るなど、普通ならばありえないと思うだろう。

しかし正直なところ、僕もハロルド卿と似た見立てをしていた。

「今のスタッドに、味方はひとりもいませんからね。彼は忠実な僕（しもべ）ふたりを自ら切り捨てている。あのミスは大きい」

今のスタッドの側にいるのは、新たに金で雇った者ばかり。

「転々とホテルを移動し、身を守るために護衛たちを山ほど雇い、それでも信頼できる者はいない。今のスタッドは、金で安心を買うしか方法がありません。そもそも、その肝心の金すらいつまで無事でそこにあるか……じきに裏切りに遭うでしょう」

「せめてあの執事親子だけでも残しておけば、ずいぶん違っていただろうにな。裕福な娘婿とは早々に縁が切れた上に拗れているし、あれで本当にどうにかなると思っただら、スタッドは大馬鹿だよ」

スタッドは、ヴィオレッタ嬢の異母姉——イライザの結婚相手からも恨みを買っている。

豪商が欲しかったのは貴族の縁者となることによる知名度、そして他貴族とのパイプだ。多額の結婚準備金を用意したのはその目論見があつたから。

それがイライザと結婚して間もなくレオパーファ侯爵家は家ごとなくなつてしまった。豪商がい

ライザを即離縁したのも当然である。

貴族相手ならば平民は何をされても泣き寝入りするしかないが、スタッドも今や平民、ゼストハだけでなく、豪商からも何らかの報復があるのではないかと僕は思っている。

「まあ、スタッドはどうでもいいんだよ。ゼストハ男爵家に恨まれようと、頼る先がひとつもなくなるのと、雇った奴らが何を考えようともね。結局はスタッドの自業自得だからさ。でも、こっちにとぼっちりが来るのはお断りだ」

そう言つて、ジェラルド卿は神妙な顔で話を聞いていたヴィオレッタ嬢に視線を向ける。

ジェラルド卿が言っているのは、ゼストハ男爵家についてだ。僕も彼の言葉に同意しかない。

元はと言えば、イゼベルがスタッドに媚薬を盛ったのがふたりの関係の始まりらしいから、僕に言わせればどっちもどっちだ。勝手に好きだけやりあえばいい。

だが、彼らがヴィオレッタ嬢にまで手を出そうとするなら話は別だ。

「まさかゼストハ家は私のことも……」

ヴィオレッタ嬢が震える手で口元を押さえる。

「残念ながらね。ここ数日、屋敷周辺をうろつく不審な男たちの情報が入ってきている」

ジェラルド卿の肯定に、ヴィオレッタ嬢の顔色はさらに悪くなる。

「大丈夫です、ヴィオレッタ嬢。対応策は検討済みです」

「そうそう、心配は無用さ、ヴィオ」

安心させたくて、慌てて横から口を開く。そこに、ジェラルド卿が言葉を続けた。

「実は、何かあつてからじゃ遅いからつて、父上がこの件を親友の王国騎士団長に個人的に相談したんだ。そうしたら、いい提案をしてくれてね」

「王国騎士団長さまですか？ 確かランスロットさまのお義父さまでしたよね？」

ヴィオレッタ嬢が、僕とジェラルド卿を交互に見る。

「そうだよ、ランスロット卿のお義父上だ。ロージーたち救出の時にご助力いただいたのを覚えているよな？ それで今回も相談したら、若手で一番腕の立つ騎士を特別に派遣してくれると言つてくださった。その騎士にしばらくの間、ヴィオの専属護衛として側に付けてもらおうと思う」

「そんな、騎士団の方にわざわざ来てもらうなんて……」

「それが、実に適任者だね」

恐縮するヴィオレッタ嬢の言葉を、ジェラルド卿が手で制し、にこりと笑う。彼はそのまま、彼女の隣に座る僕へ視線を移した。

「というわけで紹介するよ。王国騎士団の若手一の騎士で、今日からヴィオの専属護衛を務めてくれるランスロット卿だ」

「今日からヴィオレッタ嬢を護衛させていただきます。どうぞよろしくお願いします」

僕は立ち上がつて、啞然とするヴィオレッタ嬢の椅子の横に回り込んで騎士の礼をする。

「え……？」

「命に替えてもヴィオレッタ嬢をお守りしますから、どうかご安心ください」

笑みを向けると、ヴィオレッタ嬢は戸惑いがちに口を開く。

「ですが、あの、確か令嬢令息の警護は各家で対応するもので、政治や国際問題でも絡まない限り、王国騎士団の騎士が請け負うことはない、と学んだ覚えがあるのですが……」

「はい、その通りです。ですので王国騎士団長である義父上が、僕が騎士団に入って六年あまり使わずにまるばかりだった休暇をまとめ、通常勤務日程の休日と組み合わせ、約ひと月半の長期休暇を捻り出してくれました。その期間をヴィオレッタ嬢の警護に当てます」

「でも、それではランスロットさまのせつかくの休暇が……」

「護衛にかこつけてトムスハット邸に通おうという魂胆なので、気にしないでください。休暇を使い切る頃は、ヴィオレッタ嬢のデビュタントも間近です。この護衛期間中に、ゴミの駆除処理はもちろん、デビュタントも一緒に準備できるように」

申し訳なきげに眉尻を下げるヴィオレッタ嬢に、問題ないと微笑みかける。

実際、何も問題はないのだ。この話を僕に伝える時、義父上はこう言ったから。

『デビュタントは一生に一度だから、衣装の合わせとかダンスの練習とかふたりで色々準備が必要だろうか？ もちろん、しっかりと不審人物を排除してからになるけどね』

『頑張れよ』と僕の肩を叩く義父上の笑みは、僕の幼い頃の記憶にあるものと寸分違わず優しくて、この人を『義父上』と呼べる幸せを、今さらながら噛みしめる。

ああ、そうだ。かつては叔父上と呼んでいた。心の中でいつも「僕の父親が叔父上だったらよかったですの」と思いながら。

今はその願いが叶ったただけでなく、僕にはきつと見つけることは無理だと諦めていた愛する人にも出会えた。

その愛する人を狙う者がいるというのなら、休暇を使ってでも護衛に就くのは当たり前だ。

「そういうわけだから、ヴィオ。大人しくランスロット卿に護衛されなさい」

ジェラルド卿の言葉は、僕の気持ちをそのまま表している。

そうだよ、ヴィオレッタ嬢。君が安心できる環境を必ず作ってみせるから、それまでは大人しく僕が護衛に就くことを受け入れてほしい。

「ようこそ、ヴィオレッタさん。いらしてくださいさって嬉しいわ」

ヴィオレッタ嬢の専属護衛を務めて一週間、ヴィオレッタ嬢は今日、バームガウラス邸に来てくれる。ジェラルド卿も一緒に、今夜はふたりともバームガウラス邸に泊まる予定だ。

実は不審人物の対応策の一環なのだが——母上やヴィオレッタ嬢には伝えていない。

エントランスでヴィオレッタ嬢を迎える母上は、一体どれだけ嬉しいのか、いつもより少し高い声に、今にも花が咲きそうな満面の笑みを浮かべている。

いつもは落ち着いていて淑女の鑑のような人なのに、ヴィオレッタ嬢の手を取り、勢いよくぶんぶん振ったりして、それはもう分かりやすく浮かれていた。

ふたりが初めて会ったのは人質救出作戦直後で、なんだかんだ慌ただしいまま終わってしまった。ヴィオレッタ嬢と婚約した時も、僕が指輪のサイズを知らなかったせいでバタバタして——そういえば、あの時も母上はずいぶん心配していたな。

そう考えれば、ちゃんとした対面は今日が初と云つていい。母上の浮かれっぷりも納得であった。「なんて可愛らしいお嬢さんかしら。ラシエル・シュテルフェンよ。やっと落ち着いてご挨拶できましたわ」

「ヴィオレッタ・トムスハットと申します。シュテルフェン伯爵夫人にお会いできて光栄です。前は、きちんとご挨拶もできず失礼しました。ランスロットさまには、いつも助けていただいております」

「あの子が役に立ったのなら嬉しいわ。ランスつたら、毎日眉間に皺を寄せて、どうやってヴィオレッタさんを助け出すか考えこんでいたのだから。何も知らなかった時は、どんな難しい任務を割り当てられたのかと心配になるくらいだったのよ」

「は、母上、その話は」

慌てる僕をよそに母上は言葉を続ける。手は今もすっかりヴィオレッタ嬢と握り合ったままだ。

「うふふ、そうしたら夫が、ランスはヴィオレッタさんを助け出すために走り回っているんだって教えてくれてね。安心したら、今度は私も何かできないかと思って思うようになって、協力したいと夫にお願ひしたのよ」

「ロージを隠していた孤児院に行ってくださいだったのですよね。夫人の言葉に勇気をもらつて庭まで走れたとロージが言つておりました。本当にありがとうございました。あの時は娘さんも一緒に来てくださったのですよね」

ヴィオレッタ嬢の言葉に、母上はぼつと顔を輝かせる。

「ええ、そうなのよ。ミルドレッドというの。ロージが九歳と聞いたから、四歳のミルを連れて行つたほうが自然かと思つたの。ちよつとドキドキしたけれど、なんとか役目を果たせてよかつたわ。実際の救出時は馬車で待機だったから、ただ作戦の成功を祈るしかできなかったけれど」

「十分です。心から感謝しております。ずっとミルちゃんにもお礼を伝えたいと思つていたので。あの、今日はお会いできませんでしょうか？」

「ええ、ぜひ会つてやってくださいな。あの子は今、サロンでヴィオレッタさんに出すお菓子をお皿に並べているところですよ。お気に入りのお菓子を『にいたま』の大切な人にも食べさせてあげたいと言つて」

「まあ、お気に入り……光栄ですわ」

すっかり意気投合した母上とヴィオレッタ嬢の会話は途切れない。それ自体は嬉しいことだが、ここはエントランス、早くサロンに案内したほうがいいのではないだろうか。

「母上、ミルが待ちくたびれてしまいますよ？」

「あら、そうだったわ。私つたら、会えて嬉しくてつい……こほん、ごめんなさいね、ヴィオレッタさん。どうぞこちらへ、サロンにご案内しますわ」

楽しそうに話しながら母上とヴィオレッタ嬢が奥に進む後ろ姿を見送る。残念ながら、僕は今日は欠席だ。踵を返してエントランスポーチへと足を進める。

今日ヴィオレッタ嬢には、トムスハット家が所有する中で最も目立つ馬車に乗ってきてもらった。白地に青のラインが入ったデザインで、扉には大きく刻まれた家紋。遠目からでも、すぐにトム

スハット家の馬車と分かるものだ。狙っている側からしたら、特定も追跡もしやすい親切設計に映るだろう。

それに、今日のヴィオレッタ嬢の外出予定は数日前からそれとなく噂で流してあるから、このところトムスハット公爵邸周辺をうろろしている不審人物たちの耳にも入っているはず。

ずっと屋敷から出ることのなかったヴィオレッタ嬢の、久しぶりの外出。理由は婚約者からのデートの誘い。

ご丁寧でデートコースの情報まで流れているが、その不自然さを怪しむ頭が果たして彼らにあるかどうか。確かめるのは、これからこの馬車に乗ってデートコースを回る僕の役目だ。

「……ランスロット卿。君が強いのは知っているけど、くれぐれも気をつけて行ってくるんだぞ」馬車に乗り込もうとする僕に話しかけてきたのは、ジェラルド卿。聞えない彼はバームガウラス邸に残る。これから、応接室で待っている義父上と打ち合わせの予定だ。

ジェラルド卿は僕と一緒に不審人物対策をとっているため、今日の外出の本当の目的についても当然ながら知っている。

「大丈夫ですよ。僕ひとりで向かうわけではありませんから」

「……本当に気をつけてよ。ランスロット卿が怪我なんかしたら、ヴィオが泣くぞ」

「ははっ、それは絶対に避けないと」

ジェラルド卿は荒事に慣れていないせいか、僕を心配してなかなか応接室に向かおうとしない。声をかけるタイミングを計っている執事に視線を向け、ジェラルド卿を案内するよう言いつける。

「帰ったらすぐ報告に行きますから、その時にゆっくり話しましょう」

「分かった。話は帰ってきてからゆっくりな」

「はい、お任せください」

ジェラルド卿の言葉に笑みを返し、僕は馬車の踏み台に足をかける。

馬車内には、僕と従者のアルフの他に、女性騎士がひとり乗っている。彼女にはヴィオレッタ嬢の髪色のかつらをつけ、僕の対面に座ってもらう。

馬車から少し距離を取って騎乗する騎士が五名、御者も騎士が扮しているし、噂で流したデートコース各所に騎士を数名ずつ待機させた。

「では行こうか。最初は王都郊外に近い公園だったかな」

情報として流したデートコースはいずれも王都の中心から外れたところ。北へ南へ東へ西へとやたら走るようにした。あちらは襲撃のしやすさを喜んでいるだろう。

「……現れました」

バームガウラス邸を発^たって半刻、同乗するアルフが囁く。

最初の目的地である公園の手前、小さな林を通り抜けている時だ。馬車の行く手を塞ぐように、切り倒された木が地面に横たわっている。

スピードを落とした馬車の前、ばらばらと出てきたのは数人の男たち。

「あの人数なら、外の者たちだけで足りませんが」

小窓から外を確認したアルフの声に、僕は首を横に振る。

「大切な婚約者に害をなそうという連中だ。この手で成敗しないと気が済まない」

そう言うなり、停まった馬車の扉を開けて、ひらりと降りる。

加勢しようとする御者を制し、背後から駆けてくる騎士たちにも手出しをするなど合図した。戦えるのが僕ひとりと思わせたほうが油断を誘える。

「女は馬車の中だ！」

三人ほどが僕を囲むように立ち、後ろのふたりに声を張る。僕が彼らを相手にしている間に、馬車からヴィオレッタ嬢を連れ去ろうという魂胆だろう。木立の向こう、逃走用の馬がいるのがちらりと見える。

「……勝手に内輪もめしているだけならば、放っておいてやったのに」

ヴィオレッタ嬢を攫うなど、計画を立てるだけでも許しがたい。ようやく笑えるようになったのに、その幸せを奪おうなどと。

腰に提げていた剣を抜き、声低く呟くと、男たちは気圧されたように一歩下がる。

「怯むな！ 相手はひとりだ、倒す必要はない！ 女さえ奪えればいいんだ！」

木立の向こう、馬のいる辺りから声が上がる。

見張り……違うな、戦えないから遠くから様子を窺っている。偉そうに指図しているから、おそらく奴が首謀者だ。つまりヴィオレッタ嬢を狙っているのはあの男。

ならば、まず捕まえるべきはあいつだ。

僕は、足止めしようとして近寄ってきた男たちを躲し、木立の向こうへ走る。

馬車内の婚約者を守るために立ちはだかると予想していた三人の男は、あっさり馬車から離れた僕の行動に揃って「え？」と間拔けな声を出す。反対側から馬車に近づいていた者たちも同様だ。

そうだな、お前たちの読みは正しい。確かに何があるかと離れなかつただろう、もし本当にヴィオレッタ嬢が馬車の中にいたならば。

「え、な………？」

同じく呆けた声を上げたのは、馬の側にいた男。安全なところから見物していたつもりが、ものすごい勢いで僕が駆け寄ってきたのだ。驚いて硬直したまま、呆気なく僕に腕を取られて地面に引き倒される。

「なんで……デートだって……なぜ女を守らずに、こっちに来るんだ……!？」

男は呆然と叫ぶが、ヴィオレッタ嬢は乗っていないのだから当たり前だ。むしろ僕としては、危険人物が一箇所目であっさり釣れたこの状況が驚きだ。

畏を張った僕が言うのも変な話だが、実に考えが浅い。

視線を馬車に向けると、あちらもすでに襲撃者たちの拘束を終えていた。離れて付いてきた騎士たちに連行を頼み、僕たちはそのまま予定ルートを進む。公園近くに配置していた待ち伏せ要員で人員補充すれば問題ない。

「これ以上回っても何もないかもしれないが……」

せっかく囨にトムスハット家の馬車を借りたのだ。襲撃を考える愚かな輩がひとりとは限らない

し、何よりヴィオレッタ嬢の安全のためだ。念を入れて仮想デートコースを回り続けると、三箇所目でまたしても襲撃を受ける。

こちらは中年の男ひとりの犯行で、馬車から降りるところを狙って、ヴィオレッタ嬢のふりをした女性騎士にナイフで襲いかかった。もちろんあっさり振り返り討ちにし、早々に捕縛、連行する。

その後は何もいままデートコースを回り終え、僕は予定通り夕刻前にバームガウラス邸に戻った。

襲撃者捕縛の報告を義父上から聞いたのだろう。出迎えたジェラルド卿の顔は心配の色で染まっていたが、怪我人がひとりもないと聞いて安堵していた。

ヴィオレッタ嬢は母上とミルと三人でのお茶会を楽しんだようで、サロンに向かうと明るい笑顔で迎えらるる。

「おかえりなさいませ、ランスロットさま。騎士団の急なお仕事、ご苦労さまでございました」

不在の言い訳を素直に信じてくれたヴィオレッタ嬢の笑みに、不安の色はない。

彼女に危害が及ぶ前に不審人物を排除できたことに、僕は心の中で安堵の息を吐いた。

ジェラルド卿とヴィオレッタ嬢を交えて夕食を取った後、夜八つになるのを待ってジェラルド卿が泊まる客室を訪ねる。

手には作成したばかりの供述書。バームガウラス家の騎士たちが、私兵団詰所の地下牢に入れた襲撃者たちから得たものだ。念には念をと、夕刻以降にもう一度馬車を走らせたが、さすがにもう

襲撃はなかった。

「目的は誘拐……へえ、身代金目当てね。で、こっちは傷を負わせたかったと」

供述書に視線を走らせるジェラルド卿の声は、いつになく低い。

気持ちには分かる。彼らの言い分は到底許せるものではない。

僕がデートコースの一箇所で捕まえた男はゼストハ男爵の弟、そして三箇所で捕まえた男はゼストハ男爵家で働いていた遠い縁者だった。

「男爵の弟は、復讐や怨恨より金欲しさの犯行です。綿花畑の管理の仕事も家も失い、生活に困窮するようになったことから、八つ当たりに身代金を要求することを思いついたようです」

管理していた綿花畑が今はトムスハット家所有となっているのも、気に入らないのだろう。ヴィオレッタ嬢を攫って得た身代金で当面の生活費を賄おうと考えていたようだ。

「生活に困っているなら、破落戸に余計な金を渡すなよ。五人も雇っておいて『金がなくて困っていた』とか、言っていておかしいと思わないのかね？」

ジェラルド卿の言葉に同意するしかないが、ゼストハ男爵家の者は揃って短絡的な思考の持ち主なのだと思っ。

「何が『ひとりだけ洞落から逃れたヴィオレッタからおこぼれをもらう権利がある』だよ。ふざけるな！」

供述書に記されたゼストハ男爵の弟の主張に、ジェラルド卿が声を荒らげる。

「……ヴィオレッタ嬢こそ被害者なのに、勝手なことを言う者ばかりで嫌になりますね」

捕まえた縁者の言い訳も勝手なものだった。

綿花畑の監視人のひとりだったという縁者の男はヴィオレッタ嬢を逆恨みし、傷を負わせて令嬢としての価値をなくしてやろうと考えていたようだ。

「まったく。自分の姪が厚かましくも叔母^{叔母サベス}上の後釜に収まった挙句、母娘でヴィオを虐げていたのを容認していた奴らが何を言う！ ダビドの隠匿にも関わってたくせに、よくも図々しい考えを……っ！」

ゼストハ男爵の弟や遠い縁者の男は、スタッドの巻き添えを食らって何もかも失った。

しかし大元を辿れば、スタッドに恋慕したイゼベルの暴走が事の発端と言える。

イゼベルが媚薬を盛ってまで近づかなければ、スタッドがどれだけ乱暴な未来計画を立てていたとしても、レオパーファ領内にいた他の寄り子貴族たちのように、彼らは変わらぬ生活を今も維持できていただろう。

「取り調べが終わったので、捕らえた破落戸たちは騎士団に引き渡します。男爵の弟と縁者の処遇について希望はありますか？」

「トムスハットがもらいたい。父上も、奴らにちゃんと挨拶^{挨拶}したいだろうからな」

供述書を握り潰さんばかりのジェラルド卿に問うと、想定通りの答えが返ってくる。

ゼストハの関係者は旧レオパーファ領から追われた元領民。そして、現在その地を治めているのはトムスハット家だ。

当主自ら裁くというなら任せるまで。

「父上は優しいから、奴らがそこまで金に困っていると知ったら、きつといい働き口を用意してくれるだろうさ」

ジェラルド卿の黒い笑みに彼らの末路が容易に想像でき、思わず苦笑した時、扉をノックする音が聞こえた。

「失礼します。ヴィオレッタ嬢がいらっしやっております」

「ヴィオレッタ嬢……」

一瞬、僕に会いに来てくれたのかと喜びが湧くが、ここはジェラルド卿が泊まる客室だっと思ひ出す。自然と肩が落ちてしまうが仕方ない。

「あゝ、ええと」

先ほどまでの黒い笑みを引つ込めたジェラルド卿が、おろおろと扉と僕とを交互に見ている間に執事が扉を開ける。

「ジェラルド義兄さま」

執事の背後から、ヴィオレッタ嬢が少し照れたような笑みを浮かべ、顔を出す。

そんな表情を向けられるジェラルド卿を羨みつつ、黙って彼の後ろに立っていると、ヴィオレッタ嬢が僕に気づいてぱつと顔を輝かせる。

「よかった、ランスロットさま、やっぱりこちらにいらっしやったのですね」

「え？」

「ん？」

僕とジェラルド卿は、同時に呆けた声を出してしまった。

「実は、折り入ってランスロットさまにお願いがあつて、でも部屋には戻っていらつしやらないと聞いて、先ほどからお姿を捜していたのです。そうしたら執事さんが、ジェラルド義兄さまの部屋にいらつしやるのではと案内してくださつて……」

「僕を捜して……？」

一瞬で気分が浮上した僕は、思つていたより単純な人間だったらしい。

「気を遣つて損した」と横でジェラルド卿がぼそりと呟いているが、気にせず前に進み出る。

「お手間をかけさせてしまいました。僕に何のご用でしょうか」

「あの、私たちの帰りは明日の午後の予定でしたよね。それで……もしよかつたらなんですけれど、明日の朝食の後、厨房をお借りできたらと……」

「厨房、ですか？」

問い返す僕に、ヴィオレッタ嬢は顔を赤らめながら頷く。

「実は、その、ミルちゃんにクッキーを作つてあげたいのです。もちろん、ランスロットさまの許可が頂けたら、ですが」

「クッキー……」

「はい。お茶会で甘いもの話題が出た時に、クッキーを作れると話したんです。その……使用人のように扱われていた時に覚えたものですが、そうしたらミルちゃんが食べてみたいと。料理人でもないのに図々しい申し出なのですが、できればミルちゃんに作つてあげたくて……」

「ヴィオレッタ嬢の手作りクッキーを、ミルに……」

「はい。あの……駄目でしょうか……？」

オウムのように言葉を繰り返す僕を、ヴィオレッタ嬢が不安そうに見上げる。いけない、何をぼんやりしているんだ僕は。

「つ、いえ、もちろん構いません」

「よかつた……！ ありがとうございます」

「構いません、が……」

胸を撫でおろすヴィオレッタ嬢を見て、するりと言葉が続いてしまった。

「が……？ 难道でしょうか、ランスロットさま」

ヴィオレッタ嬢が、首をこてりとかき上げて続きを促す。こんなことを言つたら、子どもっぽいとヴィオレッタ嬢に幻滅されてしまうだろうか。

「ランスロットさま？」

「ねえ、ヴィオ」

言いよどむ僕の肩をぼんと叩いて横に並んだのは、ジェラルド卿。彼はまるで僕の思考を読んだかのように言葉を続ける。

「そのクッキーさ、多めに作つて俺とランスロット卿にもくれないかい？」

「え？ 別に構いませんが……そんなに凝つたものではありませんよ？」

「いいの、いいの、味見したいだけだから。な？ ランスロット卿」

「っ、はい！ ぜび……ぜび味見させてください……っ！」

「ランスロットさまはクッキーがお好きなのですね。分かりました、頑張って作りますね」
ヴィオレッタ嬢がくすくすと笑う。

いや、クッキーが好きというより、ヴィオレッタ嬢が作ったものなら何でも食べたいというのが本当のところなのだが。

「よかったな」

小声で囁くジェラルド卿の得意げな顔が、今日ばかりは頼もしく見えた。



「すごいわ、ヴィオレッタさん。こんなにくさん、しかもとっても美味しいわ」
翌日の朝四つ。

私——ヴィオレッタは、ミルちゃんやラシエルさま、そして味見したいと言ってくれたランスロットさまやジェラルド義兄さまを喜ばせたいと思うあまり、ちよつと張り切ってしまった。

テーブルの上には、クッキーを載せた皿がずらりと並ぶ。どう見ても作りすぎである。

「クッキー、おいちい」

ラシエルさまの隣に座るミルちゃんが、味見用に皿に取り分けた分を食べ終えたところで満面の笑みで褒めてくれる。ふたりに味を気に入ってもらえてよかったと胸を撫でおろす。

「ミルちゃん、よかつたらおかわりをどうぞ」

「ありがと、ヴィオねえさま」

「私も、もう少しただいてもいいかしら？ こんなに美味しいクッキーを何種類も作れるなんて、ヴィオレッタさんはすごいわ。ねえ、ミルもそう思うわよね？」

「うん。ヴィオねえさま、しゅごいでしゅ」

「ラシエルさまもミルちゃんも、お優しい言葉がありますがどうございます。令嬢としてはあまり褒められたことではないのに、そう言っていただけでも嬉しいですよ」

令嬢の嗜みとして求められるのは刺繍やレース編み、詩の朗読などだ。料理や菓子作りは使用人がするものと忌避する貴族が少なくない。

それでも今日クッキーを作ったのは、ミルちゃんのおねだりもあるけれど、昨日ラシエルさまから令嬢時代の慈善活動の話聞いたから。

孤児院への差し入れに手作りクッキーを持って行つてとても喜ばれたこと、子どもたちの笑顔が嬉しかったことを笑顔で話してくれた。それで私も、と思えたのだ。

「私も覚えたいけれど、一種類だけなのよ。時々料理長が違う味を作ってくれたけどね。ヴィオレッタさんみたいに色々作れたら、孤児院の子どもたちにもっと喜ばれていたと思うの。ランスやミル夫も喜んで食べてくれたでしょうし。もっと頑張ればよかつたわ」

頬に手を当て、残念そうに語るラシエルさま。でも、お菓子を手作りして孤児院に持って行つていたラシエルさまは、十分にすごいと思う。

お母さまが生きていた頃に慈善活動をした記憶があるけれど、お母さまの体が弱いこともあって実際に訪問する機会はあまりなかった。物や金銭の寄付が多く、届けるのも執事のテューヴがしていたもの。

「そうだわ」

ラシエルさまが顔を輝かせ、ぱんと両手を合わせる。

「ヴィオレッタさん、私にこのクッキーの作り方を教えてくださらない？」

「そんな、私などが……」

「あら、『私など』なんて言つては駄目よ。ヴィオレッタさんだからお願いしたいの。どれもとても美味しいし、ミルも喜んでいるでしょう？ 私も作つて家族に出せるようになりたいの」

私の手をぎゅっと握るラシエルさまの目は真剣で、お世辞で言っているのではないと分かる。

『家族に作つて出せるようになりたい』

その言葉に、ラシエルさまが家族——ランスロットさまやミルちゃんやキンバリーさまをととても大切に思っていると感じる。

素敵な家族だと純粹に感心すると同時に、少しかけ私の以前の家族——ズッド実父やイゼベル義母やイラダ義姉を思い出し、ちくりと胸が痛む。

私がクッキー作りを覚えたのは、使用人の扱いを受け始めた後のこと。

最初は使用人たちの休憩時のお茶請けを作るよう言われたからだったけれど、しばらくして私の菓子作りを耳にしたイライザが持つてくるよう命じた。

でもそれは食べたかったからではなく、ただ私を馬鹿にするため。

そう、イライザは私を持つてきたクッキーの皿をひっくり返し、床に落として足で踏みつぶした。そして、驚いて声も出ない私に向かって『私に食べてほしかったら、もっとちゃんとしたものを作つてきなさいよ』と嘲笑つたのだ。

それは一度で終わらず、時には義母のイゼベルも加わつて、ただ私の作った菓子を踏みつけるためだけに持つてくるよう何度も命じられる。断る選択肢などなく、どうせ食べられないと分かつていながら菓子を作る私の心情は当然ポロポロで、しかもその頃の私は基本いつも空腹だったから身体的にも辛かった。

作り慣れてはいたけれど、一度も、そして誰からも美味しいと言つてもらえなかつた私の菓子。

ミルちゃんが食べたいと言つてくれたから、その気持ちに応えたくて作つた——それだけ。

そんな私の菓子を美味しいと褒めてもらえただけで十分なのに、互いを大事に思う家族の姿を心のどこかで羨ましがっている。ああ、私はなんて欲張りになつてしまったのかしら。

「でも、そうね……」

そんな時、ラシエルさまが何かに気がついたように口を開いた。

「知っているレシピでは、ヴィオレッタさんに目新しさがないわよね、そうだわ、ヴィオレッタさんの分は、好みそうなレシピを料理長に聞いて挑戦してみるのはどうかしら」

「え……？」

どういう意味だろう。ラシエルさまの言葉に、私は目を瞬かせる。

「えっと、私の分、ですか……？」

「そうよ。ヴィオレッタさんのレシピはミルやランス、キンバリーさまに作るとして、ヴィオレッタさんの分は何か新しいレシピを教わってくるわね」

「あの、それは、ラシエルさまが私にも作ってくださるということですか……？」

目を見開く私に、ラシエルさまがくすりと笑う。

「もちろんそうよ。家族ですもの」

「家族……」

「ヴィオレッタさんは、ランスのお嫁さんになる人だもの。それなら私の義娘でもあるわ。そうでしょう？」

「……っ」

一瞬、言葉に詰まる。

もらった言葉そのものも嬉しいけれど、それを贈ってくれた人がランスロットさまのお母さまであることが嬉しさを何倍にもしている。そんなことを言ってもらえるなんて思ってもいなかったから。

「まだ婚約中なので、家族になるのはもう少し先、ですが……」

「あら、これまで誰にも見向きもしなかったランスが、ようやく見つけた大切な女性ですもの。きつとヴィオレッタさんを手放すことはないわ。だから、もう娘扱いをしても大丈夫だと思うの」

「ラシエルさま……」

照れくさくて、嬉しくて、少し恥ずかしくて、思わず俯いてしまう。先ほど感じた微かな疎外感が、心の中からすると消えていく。

イゼベルという義母がいた時期はあつたけれど、優しく聡明なエリザベスお母さまに育てられ、気丈で愛情深いアンナ義母さまのもとに養女として引き取られ、婚約したランスロットさまのお母さまはこんなにも優しく温かい。

——ああ、私はとても恵まれている。

家族に使用人扱いされた過去の私を蔑むことなく、覚えたクッキーのレシピを実際に作ってみせればこんなに喜んでくれる。私のために料理長からレシピを教わるとまで言ってくれて。

——どうしましょう。泣いてしまいそう……

「ヴィオねえたま、クッキー、もつとたべていい？」

可愛い声が横から聞こえて、浮かびかけていた涙がびたりと止まる。

視線を向ければ、ミルちゃんが空のお皿を前に私たちを見上げていた。おかわり用にこんもり載せたクッキーが綺麗になくなっていく。

可愛いミルちゃんにじっと見つめられ、思わずどうぞと言いたくなるけれど、あと一刻で昼食の時間。これ以上はきつと駄目よね。

私は視線をラシエルさまに向ける。

案の定、今日の分はこれで終わりよとラシエルさまに言われ、ミルちゃんは残念そうに口を尖らせる。

私はミルちゃんの可愛い反応を横目に見ながら、別に用意した袋ふたつにクッキーを種類違いで入れていく。ランスロットさまとジェラルド義兄さまの味見の分だ。

多めに入れて袋の口を閉じてから、少し考える。

ジェラルド義兄さまはこのままで気にしないでしようけど、ランスロットさまに渡す分は綺麗に飾りたいわ。確か、その日の気分で選びましょうと、ジョアンが余分に準備したリボンがあったはず。

私は振り返って、扉の近くで待機しているジョアンを呼ぶ。

「未使用のリボンはあるかしら。お渡しするクッキーの袋を飾りたいの。できれば……赤か青のどちらかがあれば嬉しいのだけれど……」

ジョアンは心得た顔で頷いて部屋から出て行き、間もなく青のリボンを手に戻ってくる。

「赤色も持ってきていますが、何回か使っていますので」

告げられた言葉に、そういえば最近赤のリボンばかり着けていたことを思い出す。だってランスロットさまの瞳の色だから、つい選んでしまうの。

「贈り物にお嬢さまの色のリボンが付いていたら、きつとランスロットさまはともお喜びになりますよ」

「……そうかしら」

青のリボンを受け取って、ランスロットさま用のクッキーの袋の口をきゅっと縛る。

そうだといいわ。私がランスロットさまの色を身に着ける時の気持ちと、もし同じでいてくれた

らとても嬉しい。

「いつお渡しできるかしら。次に会うのは昼食の時よね？ それとも、帰りの馬車まで待つほうがいいかしら……?」

「お嬢さまが今すぐお渡しに行っても、喜ばれると思いますよ！」

「駄目よ、ジョアン。ランスロットさまは今、ジェラルド義兄さまたちとお話しているのよ?」

「ええ? 絶対に大丈夫だと思いますけど……」

ジョアンとそんなやりとりをしていた私は、ラシエルさまがミルちゃんの隣でにこにこしながら口にした言葉を聞き逃していた。

「うふふ、よかったわ。ランスったら、とつても愛されているじゃない」

私の髪を彩る赤のリボンと、ランスロットさまへの贈り物を飾る青のリボン。私より周囲の人たちのほうがずっと、それらの色に込められた意味を悟っていた。

クッキー作りは大好評のうちに終わり、作り方をラシエルさまに教えるのは、私のデビュタントが終わってから、となった。

なぜなら私のデビュタントは最優先事項で、完璧に仕上げる必要があるらしい。

というのも、どうやら私は今、社交界で噂の的になっているようなのだ。

スタッドが爵位と領地を売って平民になったこと、私がトムスハット公爵家の養女になったこと、加えていつの間にか離縁されて娼婦に身を落としていたイゼベルと、平民に嫁いだがひと月足

らずで離縁されたイライザ^{異母姉}。

一体何事かと社交界が注目する中、唯一貴族籍に残る私が春に二年も遅れてデビュタントを果たすとなれば、もうこれだけで十分に皆の好奇心を刺激していたのに、最近になってさらにもうひとつ皆を驚かせる発表が加わった——そう、バームガウラス公爵家当主であるランスロットさまと私の婚約である。

ファーストダンスを婚約者と踊る。つまり、春の夜会は私のデビュタントの場であり、婚約した私とランスロットさまのお披露目ともなるのだ。

だからぜひとも息の合ったダンスを披露してほしい、と周りの誰もが言った。

そんな理由で、早速ランスロットさまを交えてのダンスレッスンを始まったのだけれど。

「……あの、お二人とももう少し近くに……こう、寄り添うように立てませんか？ 子どものお遊戯ではないのですから、そのように離れられては……」

困り顔のダンス指導役に、私とランスロットさまも似たような困り顔を向ける。

トムスハット公爵邸のダンスホールでレッスンを受け始めた私たちは、早速問題に突き当たっているのだ。

ランスロットさまが期間限定で私の専属護衛になり、毎日屋敷に通ってくれているこの状況を活用して、ふたりでダンスレッスンを受け始めたまではよかったものの、私たちはホールドを組んだまま固まっている。いや、ホールドと言いつつ、互いに握った両手をびんと前に突き出した状態は正しい形からほど遠く、指導役が溜息と共に漏らした言葉の通り、まさしく『子どものお遊戯』の

ようだった。

「す、すみません……っ」

「……こちらこそ面目ない」

当然ながら嫌がついているわけではない。

恥ずかしくて近寄れない。体を寄せ合い、間近で見つめ合うなんて、想像しただけで照れてしまつて無理なのだ。

私ひとりでダンスレッスンを受けていた時はそれなりに踊っていたし、ランスロットさまも試みに指導役と踊った時は問題なかった。

けれど、私たちが組むと踊れなくなる。つまり、技術ではなく心。照れをどうにかしなければいけないのだ。

「……まさか、おふたりはデビュタントでもそのスタイルで踊るおつもりではないでしょうね？」

注意を促しても、一向に体を離れたまま近づかない。正確には近づけずにいる私たちに、指導役が呆れたように問いかける。

「いえ、そういうつもりは……」

「分かっているのだが……」

私たちはしどろもどろで答えるものの、未だ距離は取ったまま。指導役は溜息をつく。

「仕方ありませんな。こうなったらパートナーは別の男性に……」

変更するほうがいいでしょう、と続く前に、私たちふたりは勢いよく頭を左右に振る。

私たちの反応に、指導役は片眉を上げる。

「それがお嫌でしたら……どうしたらいいかお分かりですね？」

「は、はい！」

「……もちろんだ」

「……では改めて」

指導役は空気を変えようように、大きくひとつ咳払いをした。

「ランスロットさま、もつと思いい切りヴィオレッタさまの腰を抱き寄せてください。まずは距離を

詰めましょう」

「あ、ああ。分かっている」

伸ばしていた腕をかくんと曲げ、そろそろと近づいてくるランスロットさま。

遅しい腕が腰に回され、引き寄せられて、一瞬息が止まりそうになる。胸の鼓動は早鐘のようで、このままでは心臓が壊れてしまうのではないかと心配になるほど。

ランスロットさまにも聞こえてしまうのではないかしら……？

恥ずかしさで逃げ出したくなるのをこらえていると、ランスロットさまの肩越しに指導役が大きく頷くのが見えた。

「はい、ランスロットさまはそのままです。ヴィオレッタさまは、左手をランスロットさまの肩に置いて……もう半歩ほど近づけますか？」

「……は、はい」

「ヴィオレッタさま、ランスロットさま、一瞬できたからって安心して離れないように！」

至近距離で目が合って、慌てて距離を取ろうと一歩後ろに下がった私たちに、指導役の声が飛ぶ。互いが後方に伸ばした足は、その声にびたりと動きを止める。

「……そうです、そのまま。今から曲を流しますから、その待機姿勢を保ってくださいね」

指導役の合図で、長く待たされていたピアノ奏者が鍵盤に指を置く。

頬が熱く、恥ずかしさで脈打つ心臓が壊れてしまうのではないかと怖くなる。でも、他の誰かがパートナーになるのは嫌だと思っ。

それなら慣れるしかない。

そんな思いを込めて、重ねる手の指先にきゅつと力を込める。それが伝わったのか、ランスロットさまも優しく手を握り返した。

「視線を合わせて」と注意され、思い切って顔を上げると、ほんの少し先にランスロットさまの顔があり、その頬は赤く色づいていて――

ああ、と思った。きつと私も同じように赤いのだろう。

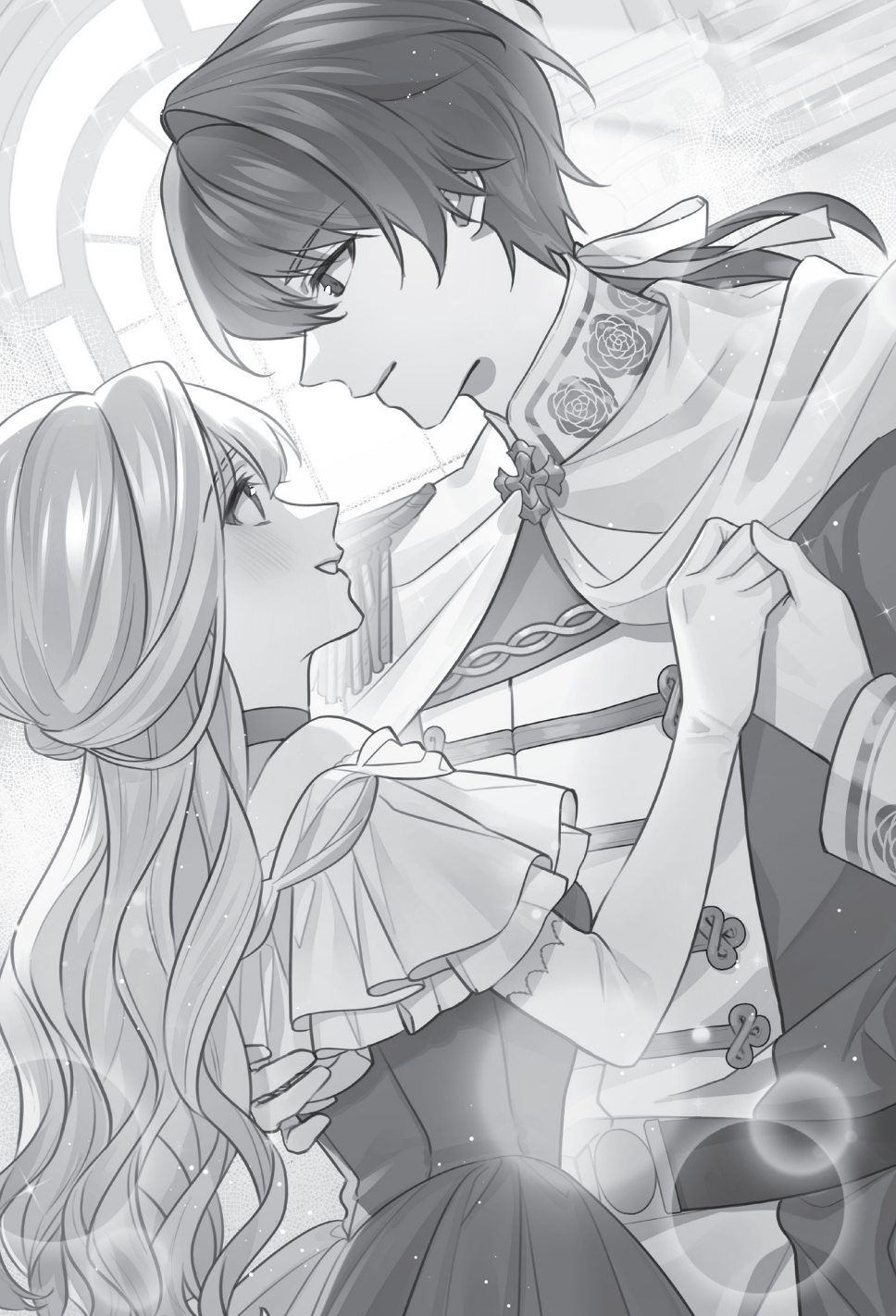
恥ずかしくて照れくさくて、でもこの手をずっと放したくないと思うこの気持ち。

なんて矛盾、なんて我儘なのかと苦笑が漏れる。

「ヴィオレッタ嬢……？」

踊っている最中に笑ったからか、ランスロットさまが不思議そうに名を呼んだ。

「よく考えたら贅沢な悩みですね。お慕いする方とこんな近くで踊れて嬉しいのに、逃げ出したい



くらい恥ずかしくて、なのにランスロットさま以外の方とは踊りたくないなんて」

「賢沢……確かにそうかもしれません。あんな無様を晒しましたが、デビュタントでヴィオレッタ嬢と踊るのは、やっぱり僕でありたいと思っていますから」

「……っ」

話しかけておきながら、返ってきた言葉に動揺してステップを踏み間違えた私は、ランスロットさまの足を踏んでしまう。

「ご、ごめんなさい……っ」

「大丈夫です。ヴィオレッタ嬢は羽のように軽いので、このくらいで怪我はしません」

「……っ」

そんなことを言われてしまえば、続けてステップが乱れてしまう。

焦る私を、ランスロットさまが両手で腰を持って高く上げ、くるりと一回転した。

「きゃっ」

「大丈夫ですよ。言ったでしょう？ ヴィオレッタ嬢は羽のように軽いつて」

着地してすぐに指導役に目をやると、ステップを間違えた上に予定にない動きをした私たちの様子に呆れている。でも、苦笑とはいえ笑っているから、気にしないでいいのかしら。

緊張が少し取れてきたのかもしれない、なんだか楽しくなってきたわ。

そう思うのと同時に、ランスロットさまが小さく笑んだ。

「……ちょっと慣れてきたみたいです。さつきより鼓動が落ち着いてきました」

「私ですわ。あの一回転がよかったのかもしれませんが」

「それはよかった。では、これからはステップを間違えそうになったら、回転して誤魔化すことにしましょう」

「まあ、それではランスロットさまが大変じゃありませんか」

「問題ありません。この調子で頑張つて、いいところを見せて指導役に認めてもらわないと。……パートナーの座は誰にも譲れませんからね」

ひとたび緊張が取れてしまえば、お互い初心者ではない私たちのダンスはスムーズになる。

一曲目はステップを踏み間違えたり、それを誤魔化すのに回転したりしたけれど、二曲目は回転を一度だけ、三曲目は回転なしで終わる。

「……仲睦まじさをアピールするのに、あえてリフトして回転を入れてもいいかもしれませんが」
最後には指導役からそんな言葉をもらい、私とランスロットさまは顔を見合せて笑った。

「お待たせしました」

ランスロットさまとのダンスレッスンを終え、着替えと休憩を挟んでサロンに向かう。

ランスロットさまも一緒に来ているが、護衛が必要になるような物騒な場ではない。いえ、ある意味ここはどこより熱気がこもる場所となつてはいるけれど。

「ドレスの色は白と決まっていますからね。装飾や小物使いで個性を出したいわ。やはりレース使いか刺繍かしら」

「金糸か銀糸で裾周りに細かな刺繍を施すのはどうかしら。光に反射して、ダンスの時に映えると思うのですけれど」

「良い案ですわね。ヴィオちゃんの髪色なら金糸かしら。ああ、婚約者の色で黒か赤の糸を使うのもいいかもしれないわ」

「白地だからとつても目を引きそうです。きっと注目的になりますわ」

そう、これは私のデビュタントの衣装についての話し合いだ。

アンナお義母さまと、バームガウラス邸からわざわざ来てくれたラシエルさま、そしてデザイナーの三人で真剣に話し合っている。今日は三回目。

子どもがジェラルド義兄さましかいなかったアンナ義母さまと、ミルちゃんのデビュタントまで十年以上あるラシエルさまは、私以上にドレス選びを張り切っている。今の私を取り巻く現状を思うと、ありがたくも心強い。

『ヴィオレッタ・トムスハットはどんな令嬢なのかって、今の社交界でもつぱらの話題なのよ。一昨日のお茶会でも探りを入れてくる夫人や令嬢の多いこと多いこと』

アンナ義母さまは、そう言つて楽しそうにふふ、と笑う。

大勢が注目する中でのデビュタントなんて私には空恐ろしいばかりだけれど、アンナ義母さまはむしろやる気がかきたえられると強気である。

『ヴィオちゃんのデビュタントは誰もが唸るような完璧なものにしてみせる』と息巻くアンナ義母さまにラシエルさまが加わり、ドレスはランスロットさまから贈られることに。でもデザインは、

せつかくだからふたりのお義母さまに決めてもらうことにした。
「ランスとヴィオレッタさんが並び立った時、誰も何も言えなくなるくらいお似合いな姿を見せつけるのが一番効果的だと思うのですよ」

休憩のお茶を飲みながらのラシエルさまの言葉に、大きく頷くのはアンナ義母さまとデザイナー。いよいよデザイン案が固まり、これから針子たちが頑張って私たちふたり分の衣装を作る。

「ふふ、お揃いの衣装が出来上がるのが楽しみね」

アンナ義母さまの言葉に、私とランスロットさまは頬を赤くしながら顔を見合わせる。

本来のデビュタントの年齢だった二年前、もしかしたらと期待して、でもやっぱり夜会には連れて行ってもらえなくて、使用人棟の端の部屋でひとり悲しくて泣いたあの夜が嘘のよう。

私は今、間違いなく幸せだ。

第二章 花笑み

僕——ランスロットが、婚約者であるヴィオレッタ嬢の護衛を務め始めてひと月。

今や、トムスハット公爵邸周辺をうろつく不埒な輩はすっかりいなくなつた。

最も成果があつたのは、デートを装って公爵家の馬車を乗り回して不審者をおびき寄せた時。

以降は小さな嫌がらせが数回あつた程度だ。もちろんヴィオレッタ嬢に被害が及ばないよう事前に対応した。

もともと主な標的がスタッドだったせいもあり、こちらが強い守りの姿勢を見せれば、あつという間に引いていった。その分、狙いが集中してスタッドの周辺は相当に騒がしいが、それは彼の自業自得、僕たちの与^{あずか}り知るところではない。

というわけで、ここ最近ではデビュタント用の衣装選びに同席したり、ふたりでダンスレッスンに励んだり、ゆっくりお茶を飲んだり、春めいてきた庭園と一緒に散策したりと、護衛というより婚約者として過ごしてばかりだ。

嬉しく楽しく至福ではあるものの、臨時で公爵家の執務を手伝っている祖父上や母上、王国騎士団内の仕事を調整してくれている義父上、補佐として忙しく立ち回る従者たちに申し訳なく、護衛任務を早めに切り上げるべきか悩むようになる。